

訃 報

三年四組 菊原静一(東京都)

北高 21 期同期の皆様にご挨拶申し上げます。わが三年四組の穴戸昭夫君は令和六年八月十六日朝七時埼玉県上尾市のご自宅にて逝去されました。奥様によれば苦しまず安らかな最期だったそうです。

急なことで連絡がつく同級生のうち埼玉県在住の斎藤文志郎と私とで二十一日の通夜に参列し翌日の告別式には都合のついた私が参列しました。また、連絡の取れた鶴島・浜野・大川・近藤と斎藤・私とで「北海道札幌北高等学校三年四組友人一同」名にて花を供えました。我々の高校時代の思い出については次の弔電に譲りたいと思います。「不器用だけど、楽しく、騒がしい高校時代をありがとう。まためぐり会いましょう。穴戸へ鶴島より」

私が穴戸の病気を知ったのは七月本人からのライン「・・・癌ってのになっちゃいました。・・・とうとう打つ手がなくなった次第。・・・」によってです。入院していて「・・・在宅になったら、あけみさん(奥様) の顔でも見に来てください」というものでした。覚悟の中にも明るい余裕を感じ取れ「わかった。・・・そのうち俺も行くんだから心配するな。・・・」と返信しました。

八月本人からの退院のラインを受け十四日に見舞ったところ居間にベッドを入れて寝ていて想像以上に痩せ衰えている。目を覚まして「これが最後だな」と真顔で言うので「嫌でなければ又来る」と応じる私に「坐れ」とソファを勧める。見舞いの品として持参した八個の桃の缶詰をテーブルに並べて見せると嬉しや初めて苦笑してくれた。会話の途中「情けねえ」と一言つぶやく。帰りがけに手を握ると「温ったけえ」とも。「文(斎藤)と又来る」と告げて立つと穴戸の目は部屋を出る最後まで私を追っていた。思えばこれが友との永訣だったのである。

十六日朝長野へ向かう新幹線内で奥様からのラインで穴戸の死を知り、あまりの急逝に思わず声を上げてしまいました。

十月の同期会では出席した同級生(長井、森田、小谷)と、穴戸も加わっていた新聞局の中西、名西には知らせることが出来ましたが、穴戸と仲の良かった丹や中井、岩本、曽根崎や森本さん始め大勢の友達がまだ彼の死を 知らないのではないか。これでは寂しい。拙文により彼の死を知り又伝え聞いた方々に穴戸のことを思い出して冥福を祈って貰いたいと思い今筆を執っています。

私は自分には穴戸という友達が居るんだと心の底に思っ何十年も生きて来ました。室蘭から札幌にやって来た彼と、私は十五才で出逢ったのです。穴戸の病気を知ってから帰郷の機会があり部屋で手紙を整理してみました。穴戸が室蘭で学生々活を始めてから東芝に就職し、私が一年留年の後就職が決まった頃にかけて、五年弱の間に二十八通もの便りが届いていました。返事はとても追いつきません。

お互い仕事が現役のうちは会う機会も少なかったのですが退職後は時々会えるのが楽しみでした。穴戸は初め裁判の傍聴に興味を持っていたようですが後に地元の少年野球に真剣に打ち込んでいました。これを誘い出しては遊ぶのです。昭和初期歌謡コンサートに大相撲に博物館に街巡りと楽しい時間を共に過ごしました。最後になった今年の五月場所後は穴戸がチャンコ鍋を少ししか食べないのがどうにも気がかりでした。

穴戸の死に顔は生前の黄疸が変じて緑灰色を呈し、眉は黒々と凛々しく睫毛は長く鼻筋が通って美男の宇宙人を見る思いがしました。しかし今考えるとあの顔は西遊記の沙悟浄のものに相違ありません。というのは、穴戸は文学青年で読書家でしたが今年直木賞を獲った万城目学の作品も愛読していて、私もたまに読んでいた万城目作品に「悟浄出立」があり昔穴戸との話題に上ったことを思い出したためです。中島敦の「悟浄出世」「悟浄嘆異」の続きとして万城目が書いたものです。葬儀を取り仕切った曹洞宗の導師様によれば、穴戸は「法海昭徳居士」という名の仏弟子になりました。そして長い修業の旅へと出立したのです。露わに見せたその太く逞しい大腿骨を頼みとして。

別れの悲しみは尽きませんが、友の旅立ちを見送り前途の成果を祈ることが出来たのは、やがて行く私にとっての仕合わせでした。合掌

南無釈迦牟尼佛 南無釈迦牟尼佛

(令和六年十二月三十一日)